

埋もれた春

秋田雨雀

人

藤之助 薬種屋の子（十二歳）

きみ子 税務署長のむすめ（十四歳）

売薬行商人

その他両家にぞくする男女四名

ところ

東北地方のある小都市のできごと

時

現代 春

第一幕

舞台は、薬種商と署長とのうら地の一部。

二軒の家は、ある小都市の郊外近くにならんで立っている。

薬種商は土着の人、署長は、南方からの移住者である。

まず、舞台の左手に、やや大きな白かべの土蔵が立っている。土蔵から左手よりいどがあり、いどと土蔵との間に大きな木が立って、赤い花が暗緑色の葉の間に開いている。

右手、イボタのかきねの上の、二、三本のモモの木に花がさいている。しかし、土蔵とモモとツバキとへ、背景として雪をいただいた山脈が見えなければならぬ。

土蔵のとびらはとじている。その側面に大きなそりをうらがえしに立てかけてある。午後の太陽はこの二軒のうら地を照らしている。

二名の男か、シャベルを持って土蔵側面にある雪を投げている。

雪のかたまりが、うら地を流れている小川の中に落ちて軽い音をたてる。時々どこからともなく子守歌が聞えてくる。

第一の男 (シャベルをついて、こしをのぼす) こしあいたくなった。

第二の男 おらもよ。

第一の男 一服やるべいや。

第二の男 もすこし待て。今、じきだ。

第一の男 だいぶんあるなあ。これみな夏までかこっておけば、雪売りになれるんな。

第二の男 そんだとも、夜宮さでも持ってけば、おそろしい金持になるべいてば。

第一の男 ははは、いなりさまの鳥居のそばさ、たわらづめにしてなあ。

第二の男 (しごとをやめて) 雪あ雪あって、ふれればよ、いい女童やど、ぞろぞろ集まってくるだ。

第一の男 (冷笑して) おまえんた男は、いい女童にや、負けてやるべい。こまった雪売りだな!

第二の男 それだはで、気まえのいい男あ、ちがったもんだてば。

第一の男 気まえが、いいたって、女童さばかりが。

第二の男 女童さ気まえ見せねで、だれさ気まえ見せるべ? (ふたりは同時にわらう。思いだしたように、ふたたび、しごとにとりかかる、短い沈黙がつづく。)

第一の男 (こおった雪のかたまりをくだきながら) モモの花までさいてるちゆうに、なんぼかた
い雪だば!

第二の男 ほんとにかたい雪だな!

第一の男 おたま屋の前だって、もうなかべい。あこは、まるで日があたらねい。

第二の男 そんな、もうなかべい。

第一の男 もうなかべいよ。(雪をきざみながら) あこのがけの下さ行けば、セリア、あるけいな。

第二の男 そんな。セリア、どっさりある。(懐想的に) おらとおめえと、あこさ行って、セリア
ったことあ、あるけいな。

第一の男 そんな。よく行ったもんだなあ。あのころの女童あど、みな、どこさ行ったがさな?

第二の男 どこさ行ったがさなあ!

第一の男 いい女童あどは、みなほかさ行くしな、ああ、つまらねいな、こうしてだって!

第二の男 ほんとだ。いい女童あど、フナだの、ハヤだのと同じで、さっさとにげてしまふな。

第一の男 そんな、みんな色気のある目つきいしてよ、さあてば、みなおたま屋のカナリヤだけ
ように、あっちの木さとんだり、こっちの木さ休んだり。

第二の男 (シャベルを絶望的について) はははは、とんだ色男あ、さおを持って青空見あげるば
かりだ。

第一の男 (山のほうを遠くながめて) あれ見ろ。

第二の男 (同じくそのほうへ目を投げる) なんだば？

第一の男 あこの藤林ふじばやしのそこ行くのあ、うちの兄あにさでねいが？

第二の男 そんだ、藤とうちやだ。藤とうちや、あこで何してるんだべな？

第一の男 はあ、本読んでらあ。

第二の男 そんだ、本を読んでらあ。兄あにさは本ばかりすきでな、なんになるつもりだべな。

第一の男 なんになるが知らねが、えらものになるべいよ。

第二の男 なんでも、うちのだんなあよ、「兄あに子の名を言えば、おらほうの町がわかるし、おらほ

う町の名言えば、兄あに子の名がわかるようにしてみせる」って言っていたけいな。

第一の男 うむ、それくらいのもんにやなるべいよ。

第二の男 あの人あ、中学の試験しけんさ行ったず話だが、まだわからねいがな？

第一の男 おら知らねいけど、だいじょうぶ及第きゆうだいだべい。だんなもおそろしく心配しんぱいしてるふうだ
な。

第二の男 そんだべって、(まじめになって)ところがよ、おらこのあいだ、表町おもてまちの仁助じんすけからいい
こと聞いたぞ。

第一の男 いいことってどうしたことだい？

第二の男 (まじめに頭をまげて考える)それが、おらにはどうものみこめねいんだよ。となりの
署長あしのおすめあ、兄あにさど、いっしょね、汽車あしさ乗って行ったず話だ。

第一の男 (おろかなるおどろきの表情をもって) はあれ、まあ! どこさよ?

第二の男 港さ行つたず話だ。

第一の男 港さ? なんしに?

第二の男 あの女童もなまいきだな。女学校さ試験受けるね、行ぐんだってよ。

第一の男 (敵対の表情をもって) あのこじきやろうの女童まで!

第二の男 あのひげのばけものの女童どいっしょに汽車さ乗るなんて、うちの兄さもよっぱあ
きれだもんだ。おら、それ聞いてくやしくてくやしくてならなかつた!

第一の男 それだれが見だがな?

第二の男 仁助あ見だ、(冷笑するような表情で) なんでもふたり、同じまどから首だしてい
だず
でば、あきれだもんだ!

第一の男 あのこじきやろうの女童ど!

第二の男 あのばけものの女童ど!

第一の男 (嘆息す) おら、真にされねい。

第二の男 おらも真にされねい。

(このとき左手かきねのほうで、女どものよぶ声がする。ふたりは急に会話をやめて、そのほうに注意する。)

第二の男 見る、あのばけものうちのめんかすども、こっち向いで何が言ってる！

第一の男 (挑戦的に、やばんな表情をもって) うむ、何が言っている。聞けねい。

(ふたりは、ロシア人に対するような憎悪の表情で、そのほうに耳をかたむける。)

第一の女 (やや近く) 雪をかきねのほうへ投げちゃいけませんよ。

第一の男 なんだ、かきねのほうさ投げじゃならねい！ (第二の男に向かい) 雪、かきねのほうさ投げるなだってよ。

第二の男 いったいだれや、かきねのほうさ雪投げだ？ 言ってみろ、このめんかすども、目あ、あつたら見ろ！

第一の女 まあ、ひどい人たちだこと。ごらんなさい、こんなにかきねに雪がのっかってるじゃありませんか？

第二の女 その人たちにや、目がないんだよ。みなめくらだ。

第一の男 なんだ、めくらだ。おめえだじあ、女こじきだ。どこから来たが知れだものでねい。ひげのばけものの飯食ってる者あ、みなばけものだ。

第二の男 なんだ、そんな顔さおしろいべたべたぬって、法界節にでもなる気だべい。

第一の女 まあ、ひどいやつばかりなこと！ おまえたちのようないなか者とものを言うのは口のけがれだよ。なんでもいいから、うちのかきねのほうへ雪を投げるのだけはよしておくれ。

第二の男 うちのかきね？ そこあな、校長さまの屋敷だよ。いばったこと言うな！

第二の女 (議論の弱点をおさえたというように冷笑する) ふむ、だれの屋敷だって、借りて
いるあいだは、自分の屋敷と同じことだ。

第一の男 (論鋒を引き受けるように) それに「口のけがれ」っずのあなんだ。おめえたちもおめえたちのひげも、あのひげの童も、みないなか者のおかげで飯食ってるだべい。それごとよ、
年始にも来ないし、おじぎ一つもしないのあ、上方もんが？ あきれたもんだ！

第二の男 それさ、あの女童のなまいきやろうも、ろくなもんでない。あんたら女童あ、うら町の
茶屋さ売ってやればいちばんいい。

第一の女 (第二の女に) お嬢さんの悪口を言ってるんだよ。何を言うんだか、ちっともわから
ない。

第二の女 お嬢さんの悪口を言うと、だんなにみな言いつけてやるからいいよ。

第一の男 あんたらだんななんだば！ あのひげのばけものだっけ何もこわくねい。

第二の男 おめえのとこのこじきやろうな、どろぼうだ！

第一の女 どろぼう？ いっどろぼうした、言っごらん。

第一の男 言えねいど、思ってるが？

第二の女 そんなら言って見ろ。

第二の男 言うとも。大どろぼうだ。

第一の女 だから、うちのだんながどこで、何をぬすんだか言ってごらんよ。

第二の男 あれや、どろぼうでなくて、だれやどろぼうだ……おら言うぞ、いいが……どってんするな！

第一の女 早く言ってごらん。

第二の男 言えねいでどうする、あのな……あのな校長さまこうちやうさまとこのリンゴぬすんだの、あれやだれだ？ そのリンゴを、小包こづつみにして、郵便局ゆうびんきょくさ持って行ったのあれやだれだ？ それこそ、言ってみろ！

第一の女 まあ！ あきれてものが言えないよ。校長さまのリンゴをぬすんだのがだれだって、リンゴの番人じゃあるまいし、どうしてそんなことがわかるものかね。

第二の男 番人にやわからのうても、どろぼうにやわかるべい。ぬすんだリンゴさ、何のなにがしど札ふだつけで、郵便局ゆうびんきょくさ持って行く者ものあいなか者にやできねい芸当げいとだ！

第二の女 (冷笑れいしやうして) おまえたちに言っておくがね、うちで送った小包のリンゴに、ぬすんだりンゴがただの一つだってありやしないよ。

第一の女 みな、りっぱに金かねをはらっているんだよ。それがうそだと思かうなら校長さまに聞いて見るがいいやね。そんなこと言うくらいなら、おまえたちのだんなこそ大どろぼうだ。

第一の男　なんだ、おらのだんなどろぼうだ？　何をどこでぬすんだ？

第一の女　雪がこいの木をぬすんだよ。うちのだんなさまが、このかきねのところへ雪がこいをこしらえたんだよ。それを、おまえさんがたのだんなが、自分の雪がこいの木の中へ入れて持って行ってしまったじゃないか？

第二の女　どろぼうだ、大どろぼうだ！

第一の男　そんだらな……そんだらな……おらうちのいどさ紅べにがら入れだのあだれだ？　飯めしの中さ紅べにあついで、赤くなる、お茶飲むべどもってお茶つげば、お茶赤くなる、おまえのうちのひげあ人べにごろしだ！

第一の女　（第二の女とかきねぎわに進み出る）なんだと、おまえたちのいどへ紅べに入れた？　そんなら、去年きよねんのお盆ぼんのとき、うちのお玄関げんかんへ地蔵じぞうさんをならべて行ったのあ、だれのしわざだかうちではみな知っているよ。

第二の男　そんだらな……そんだらな、うちのだんなの、はこそりの金きんぶっぱいで、かじやさ売つたなあ、だれだが知ってるぞ。

第二の女　うちのだんなさまを人ごろしだつて言うけれども、おまえたちのだんなこそ人ごろしだ。ききもしない薬くすりを人に売りつけて金かねをとるじゃないか。

第一の女　おまえたちのうちあ、千金丹せんきんたん売りだ！

第一の男　まいない、取りのひげあ、玄法げんぼう（女郎じよろう）受けうけだしたぞ！

第二の男 今のひげのかかあだって、玄法げんぼうだか草餅くさもちだかしれたものじゃねい。

第一の女 おくさまが玄法だって？ うちのおくさんはな、りっぱな裁判官さいばんかんのおうちからおよめにいらしたんだ。

第二の女 そうよ。いったいなら、おまえたちなんかには、拝みたいって拝めないかただよ。こないなかへなんかおいでになるかたじゃないんだよ。

第一の男 はあ、はあ、これやおもしろいな。ほんだら、なしていなかの飯食ってるんだ？ いなかあ、きらいだら、いなかにいねばいい。まい、ない、取って飯食ってるひげのばかやろうなんだ！

第一の女 おまえたちのような、もののわからないやつらと話していると、日がくれてしまう。だんなさまがお帰りになったら、みな言いつけてやるからおぼえておいで。

第二の女 (第一の女の耳に口をあてて私語しごする) おまえたちの店みせではね、印紙いんしをはらない薬を売ってるだろ。うちのだんなの考えひとつで、おまえたちのうちで商売しょうばいができなくなるんだよ。そしたらどうだ？

第一の女 店がなくなれば、おまえたちはおはらいばこだ。

第一の男 なんだと、おまえたちのひげあ、かどの酒屋さかやから犬の子もらった。犬の子もらったとき、金ももらった。

第一の女 (去りさかけながら) もうもう、なんとも言うがいいや。わたしたちは知らない。

第二の女 ばか者ものとものを言っているひまなんかないんだよ。

第一の女　いくら薬屋でも、ばかにつける薬はないと見える。

（ふたりの女いそいで去る。）

第一の男

（憤然ふんぜんとして、女のほうを見送っている）今に見れ、どうするか！

第二の男

（てごろの小石を手に持って立ちあがる）あのめんかすども、待で！

（ふたりは、発砲はつぱう後の兵士のように緊張きんちようした表情ひようじようで、右手に目をそそいでいる。この短い沈黙ちんもくを、きわめてとうとつに、ガラスのはげしい音がやぶる。ふたりの男は、やや意外いがいにおどろいたというふうに、シャベルをすてて倉くらのうしろのほうへにげる。）

（間）

（藤之助とうのすけは、小川をとびこえて、正面から出てくる。かれは十二歳さいの少年としては、ややませた表情かおをしている。青白い顔かおには、伶俐れいりと早熟そうじゆくとの神経しんけいがよわよわしく波打なみっている。かれはヨーロッパの多くのメールヘンの中に見える子どもと同じような感じをあたえるようなタイプの子である。かれは現実げんじつの争闘そうとうに対して侮蔑ぶべつを持っているように、静かな微笑びしょうをうかべている。土蔵どそうのそばを静かに歩いてツバキの木の下のあたりに立つ。しかし、け

っして日本の演劇えんげきの多くの中にあらわれている、子役こやくのセンチメントを持っているのではない。）

行商人 (右手かきねのかげから、静かに出る。旅たびにつかれたような、ひとりの老人ろうじんである。紺こんのふろしきを重そうにせおっている。つましげな目つきであるが、経験けいけんから得たえ神秘的な洞察どうさつの力がひそんでいるように見える)ごめんくださいまし。へい、このへんに丸藤まるふじと申します薬種やくしゆ屋やがございませんか？

藤之助 (すこしおどろいたような表情ひょうじょうで、やわらかな目を老人ろうじんに投げる)丸藤まるふじ? おらのうちあ丸藤だ。

行商人 (目をかがやかして)へい、おまえさまは、丸藤の身内みうちのかたでございますか？

藤之助 そうだ。何か用あるの？

行商人 (左手に指示しじして)へい、それでは、こちらが丸藤さまのおうちでございますか？

藤之助 そうだ。おじいさま、どこからきたんだ。

行商人 てまえはへい、北越ほくえつのほうから旅をしてまいりました。

藤之助 ふん、そんなやおじさん薬売くすりうりが？

行商人 さようで。ダラスキイとウルユスと千金丹せんきんたんでございます。

藤之助 ダラスキイ? ダラスキイはおまえさんの本舗ほんぽが？

行商人 もちろん、てまえどもが本舗ほんぽでございますが、へい、当節とうせつでは、にせものがたんとござい
ますで、それにせもののほうがかえって本舗ほんぽだなどとふれ歩いておりますで、まことにへい、
こまります。

藤之助 (興味きょうみを持って) うん、おらうちにあるダラスキイあおじいさんのダラスキイだかな？

行商人 もちろんでございます。こちらさまはへい、四十年しじゅうねん来のお得意とくいさまですで、へいもうよそ
ほかのダラスキイのまいりますわけがございません。

藤之助 それでも、時々ときどきちがったものも、あるよだよ。

行商人 なかなかもちまして、もちろん、かつこうのちがいますのも、あるでございますが、品しなが
みな同じことでございます。二十銭にじゅうせん、十銭じゅうせん、五銭ごせんとこう三さんとおりになっております。ごぞんじの
とおり、(ふところから浅黄あさぎ染めの手ぬぐいをだし、その中から、大小三だいせうさんこのふくろをだして見
せる。藤之助は軽かるいエモオションをもって手ぬぐいの中をのぞく)これがてまえどもの製剤せいざいで
ございまして、これがみな口にはさみますと、ばりばりという音をたてまして、くだけるので
ございます。そこへまいりますと、よそほかのにせものには砂すなとかそのほか有害ゆうがいなものが混こんじ
ておりますで、ざりざりいたします。ご存ぞんじのとおり、てまえどもでは、お上かみからいたたきまし
た定紋じやうもんをいちいちおしてございます。この定紋じやうもんがだいじなのでございます。へい。

藤之助 (ふしぎな興味きょうみを持って、進み出で) ふん、その定紋じやうもんはなんと紋もんだ。

行商人 このご紋もんでございますか。これは、それ近衛このえさまのご紋もんで「ぼたんの丸まる」というのでござ

います。みな、こうして金箔きんぱくでおしてあるのをございます。

藤之助 (じつとして、行商人の手ぬぐいを見つめている。めまいをおぼえるような見つめかたをする。)

行商人 (しわの多い手で、手ぬぐいをたたみながら) それはそうと、丸藤まるふじさまのおたくは、以前いぜんからこちらでございましたかな。なんだかようすがちがいますようでございます。

藤之助 (ゆめからさめたように) おらのうちか? もとからごだ。だども、だいぶつくり変かえたんだよ。おじいさん、おらのうちさ来たことあるの?

行商人 へい、十二、三年まえには、ちよいちよいかがいしましたことをございますが、そのおりと、どこからどこまで、すっかり変わっておりますな。その時分じぶんには、こっちのうちもございませんでしたし。(右手署長うでやちやうのうちのほうを指示しじして) このほうはいつたいの野原でございましてな、汽車きしやの通るのが見られたくらいでございましたよ。

藤之助 それじゃ、おらの生まれねさきだな?

行商人 (藤之助とうのすけの顔かおを見て) さよう、そのころ丸藤まるふじさんにはお子さんが、ひとりありました。なんでも、それは女のお子さんのようでな。(ふたたび藤之助を見つめる) それでは、その子ども衆は、女のお子じゃなかったかもしれませんな。おまえさんは、丸藤まるふじさんのぼっちゃんかな?

藤之助 おら、そうだよ、だども、おじいさんの知ってるのあ、おらじゃないよだよ。おらのあねさだろう。

行商人 さよう。へい、もう古いことなので、よう記憶きおくしておりませんが、ぼっちゃんの姉さんか
もしれませんか。して、その姉さんはおいくつでいらっしやいますな？

藤之助 (さびしい表情ひょうじょう、しかし軽く言う) おらの姉さ、死んだ。

行商人 (べつにおどろきもしない。心持目を大きく開いて、何物かを見つめるような表情) へい。その姉さんがなくなられたかな、そして、それがいつごろのこと？

藤之助 四年ばかりまえだ。

行商人 四年ばかりまえに。それじゃ、丸藤まるふじさんも、さぞお力落しだろう。ぼっちゃんもさびしゅうございましょう。

藤之助 さびしいよ。でもおらの姉さ、どこかにいるような気がするよ。

行商人 (微笑びしょうする) 姉さんが、どこかにいなさる！ はあ、まったくな。ほっちゃんの姉さんがどこかにいなさる。これやまったくだ。(話題わだいを変かえて) ときに丸藤まるふじさまはお宅たくでございますか？

藤之助 いるよ。おじいさん、おらのととさに用あるの？

行商人 へい、このたびてまえ、北海道ほっかいどうへまいりましたで、へい、もうだんなにも、しばらくお目にかかりませんし、ちよっくらお会い申したいと思ひましてな。

藤之助 そうか。おじいさんのこと、おらも見ただことあるように思うよ。

行商人 (左手ひだりてのほうへあゆみながら) さようで……それでは、おもて通りのほうからまいりましたよう。(土蔵どそうの前に立ち) いやふしぎなもので、ここへまいりましたら、はじめてお宅たくのかつて

がわかりました。この倉のかげが池になりますな……池のところに、小さな、いなりさまのお堂がございましょう……。

藤之助 (行商人を見送るように) そうだ、あぶないよ。まっすぐに行けば、酒屋の勝手だよ。

行商人 (つつましげなようすで、左手に去る、しかし声のみが聞えている) おお、雪がまだだいぶ残っておりますな。

藤之助 おじさん、そこから左へまがるんだ。

(藤之助は、土蔵のとびらの前に立って、そのほうへ目を投げている。)

(子守歌の声の中に、静かに幕をおろす。)

第二幕

前幕とほとんど同じ光景、ただし土蔵のとびらが開かれています。ツバキの花の位置がいくらかことなっている。土蔵のそばの雪は、みなとりのぞかれ、モモの花かいつそうさかんなくなって、かきねの上に質朴な色をもっている。翌日の午後のできごとである。午後の日が舞台の後方をさしている。

藤之助は倉の石段にこしかけている。そのそば、開いた右のとびらの前に十四歳くらいの

女の子が立っている。女はさげがみで美しいかつぎを着ている。細面ほそおもてで、美しい目、しかし藤之助に比しては、いくらか現実的げんじつてきな感じのする子である。

きみ子 (姉のようなようすをしている) わたしのほう、まだわからないの。あなたのほうは、もうわかって？

藤之助 おらのほうもまだわかりへん、きっと落第らくだいだと思ひし。

きみ子 そんなことなくってよ。わたしこそきつと落第よ。だって、地理の問題、たいへんむずかしかつたんですもの。藤ちゃん、ウエリングトンというところ知ってて？

藤之助 ウエリングトン？

きみ子 それでも、マニラなら知ってたわ。

藤之助 フィリピン群島ぐんとうの港みなとで、たばこの出るところだし、ウエリングトンどこだかしら？

きみ子 それが、どうしても思ひだせなかつたの。わたしくやしくて、くやしくて、なきだしたかつたわ。

藤之助 それでも、なんだか聞いたことのあるよな名だがな。地理あなん題だいおりたのし？

きみ子 五題のうち三題だけ書くといいですって。わたし三題書いたけれども、ウエリングトン知らなかつたから、よほど点てんをひかれるでしょう。

藤之助 そしたら、ほかのを書けばよかつたのを。

きみ子 だってほかのは、みんな物産ぶつさんや面積めんせきで、もっとわからないんですもの。

藤之助 おらのほうあ、あすわかるんだ。おら待ちどおしくて待ちどおしくて、なりへん。

きみ子 そう、あすわかるの？ うらやましいわね。及第きゅうだいなら藤ちゃん、すぐ港へ行ってしまいうでしよ。

藤之助 え、港さ行かなければならないし……それでも、おらだっけ、落第にきまつてるんだもの……きみ子さん、きつと及第だよ。

きみ子 いえ、わたし落第よ。あなたが金ボタンの洋服ようふくを着て、港の町を歩いてるところを見たいわね。

藤之助 (顔を赤らめている) おら、洋服だっけ着ない。

きみ子 だって、制服せいふくを着なければ先生にしかられてよ。今にごらんさい、新しい記章あたらしいきしょうのついた帽子ぼうしをかぶって、いばってくるにきまつてよ。

藤之助 そうしたことおら知らないよ。

きみ子 だって、そうよ。そして、こっちの学校のことなんかわすれてしまうわ。

藤之助 あしたこと言って、こっちのことわすれるのあ、おらでなくてきみ子さんだ。

きみ子 あら、あんなこと、わたしけっしてわすれないことよ。もしかして、藤ちゃんこっちにいて、わたしあっちへ行くくらいなら、わたし港へなんか行きやしないことよ。

藤之助 そうしたこと言っても、みなうそだ。きみ子さん赤いのはかまはいで、町でおらと会っても、

知らないふりして行くでしょう。ほらなあ赤い顔かおをしてらあ。

きみ子 (反抗はんこう的に) あら、いやなこと、藤ちゃんとうには、いい人があるんですもの、わたしのこと
なんか、じきわすれてしまうわ。

藤之助 いい人って、なんだかさ？

きみ子 あら、いい人よ。すきな人よ。

藤之助 (はにかみながら) おらだっけに、そんな人はひとりもない。

きみ子 でも、停車場ていしやばにいた人があつたでしょ。あの人、マーガレットにゆってたわね。あの人、
だあれ？

藤之助 (まじめに) あれ？ ありや、おじの家のおすすめでいし。あした女なんだって……。

きみ子 あのかたなんていうの？

藤之助 つゆ子。

きみ子 つゆ子さん。いい名だわね！

藤之助 名ばかりよくても、ぎっばぎむすめだし。

きみ子 でも、あなたすきでしょ？

藤之助 あしたむすめ、おら大きい！

きみ子 そんなら、藤ちゃん、だれがいつちすき？

藤之助 ふむ、ふむ……おらにはすきな人ないんだもの。

きみ子 そう……そんなら、藤ちゃん、この世の中の人みなきらい？

藤之助 そうでもないども……。

きみ子 そんなら、すきな人ときらいな人とあるわね。

藤之助 そりゃ、そうだし……だども……。

きみ子 (子どもらしいエモーションをもって) そんなら、だれがいちばんすき？

藤之助 校長先生！

きみ子 あら、そうじゃないのよ！ ほかの人よ……男じゃなくよ……。

藤之助 (なかばからかうように) そんだら、おらのおかあさ！

きみ子 あら藤ちゃん、ずるいことよ。いい人が、どっさりあるから、そんなこと言うんだわ。言

わなければ言わなくてもいいわ……みんなに言いつけてやるからよ。

藤之助 ほんだら、言うかな……言うかな……よそうや……。

きみ子 さあ、言ってごらんさい……おつゆさん？

藤之助 いいえ。

きみ子 校長先生のおみのさん？

藤之助 いいえ。

きみ子 酒屋のおみねさん？

藤之助 いいえ。

きみ子 (考えるようなようすをして) ああ、わかった……あててみましょうか? こう行って、

おたま屋の前の学校の横の……ね、ね、あの人でしょ?

藤之助 (すこしわらいながら) だれのことでもいいし……。

きみ子 ゆ、ゆ、ゆ、わかって?

藤之助 ゆ、ゆ、ゆ、だって、おらにはわからないんだもの、だれのことでもいいし?

きみ子 おきぬさん、そうでしょう? そうにきまったわ。

藤之助 郵便局ゆうびんきょくのあの女童めらしだっけ、おら大きらいです。

きみ子 そう。そんならだれでしょ?

藤之助 なんぼ、それでもあたりへん……それだって、そした遠くの人でないんだもの……もっ

と近くの人。

きみ子 近くの人……だれでしょう?

藤之助 ほんだら……ほんだら言うがな……だばって、おら、きまりが悪いんだもの!

きみ子 きまりの悪いことないじゃありませんか、よ、言ってごらんなさいよ。

藤之助 (指示しじして) おらの大すきな人、この指のさきにいるんだ……。

きみ子 (とつぜん顔かおを赤くする) あら、いやだこと……うそよ、うそよ、うそよ……藤ちゃんとうちゃんう

そつきね!

藤之助 おら、うそ言わねいの……。

きみ子 ……それでも藤ちゃん、じょうだんでしよう……きっとそうだわ。

藤之助 いいえ。じょうだんでないんだし……ほんとうだら、きみ子さんおこるの？

きみ子 いいえ、おこりはしないわ。でも、なんだか藤ちゃんの言うこと、ほんとうにはされないもの。

藤之助 ほんだらおらの持つてるもの、なんでもやらあ！ おとうさからもらった時計とけいでもなんでもやる。

きみ子 (藤之助のかたへ手をかけて) わたしそんなもの、なんにもほしくないの……藤ちゃん、ほんとうにわたしをすきななの？

藤之助 (きみ子の顔を見あげる) ああ、いちばんすきだ。そうだといけないの？

きみ子 いけないことないわ……それではね、藤さんわたしのすきな人を教えてあげましょうか。

わたしの大すきな人……この人よ。(人さし指ゆびで、藤之助の鼻はなをつく、藤之助わらう) ね、わかっただでしょ？

藤之助 それこそ、うそだ！

きみ子 そんなら、藤ちゃんだっとうそよ。

藤之助 いいえ、おらの言うのあ、ほんとだとも、きみ子さんの言うのあうそだと思うし。

きみ子 わたしの言うのがうそなら、あんたのもうそだ……。

藤之助 それだばって、おらはほんとうだもの。

きみ子 それならわたしのもほんとうだ……ふたりの言うのあ、ほんとうなことにしましょうよ……いや？

藤之助 いやでないの。おら、きみ子さんをせんからすきであったのだし。

きみ子 わたしも……わたしも……。 (きみ子は、おさないエモーションをもって、藤之助の手をにぎろうとする)

藤之助 (急きゆうにからだをひいて) あれ、だれかよんでる！

きみ子 (対象たいしょうをうしなったような失望しつぼうの表情ひょうじょうをもって) だれでしょう？

藤之助 だれだか、きみ子さんの名あよんでる。

きみ子 わたしには、ちっとも聞えないわ。

(ふたりは、右手の署長しよちやうの家のほうを見る。)

(やや間まをおいて、ひとりの女中じよちゆうがかきねごしに、きみ子の名をよぶ。)

きみ子 (やや快活かいかつに) なあに？

女中 (藤之助とうのすけのほうへ、さげすむような目を投げて) おくさまがよんでいらっしやいますよ。

きみ子 何か用があるって？

女中 いかがですか。すぐにおいでなさるようにおっしやいました。それに……そんなところへ

いらっしやると、おとうさまが、おおこりなさいますよ。

きみ子 なぜ？

女中 なぜって、あなた、そこが薬屋さんの、おたくでしょ。

きみ子 それが、どうしたというの？

女中 でも、あなた、薬屋さんとは……おつきあひしないことになっておりますもの。

きみ子 それは、わたしだって知ってるよ……だっていいじゃないか、わたしは藤之助さんとは、学校の友だちだもの。

女中 それは、そうでございますけれども……。

きみ子 おまえ、よけいなこと言ったんだらう。

女中 いえ、わたしは、なんにも申しはしません。

きみ子 わたしは遊んでいるよ。

女中 それでは、わたしがこまりますから。

きみ子 (うるさそうに) そんなら、じき帰るからって言うておくれ。

女中 お嬢さま、どうぞおとうさまのお帰りあそばさないまえに、きつとお帰りなさいませ。

きみ子 ああ、いいよ。

(女中は無知な憎悪の目を、藤之助に投げながら去る。)

(藤之助ときみ子は、あわい悲しみのうちに立つ。短い沈黙ちんもくがつづく。)

きみ子 藤ちゃん、あなたおこったの？

藤之助 なして？

きみ子 女中が、あんなばかなことを言うんですもの。あんた、きつとおこっているわ。

藤之助 いいえ、おらなんともないの。だばって、きみ子さんのうちとおらのうちと、なかの悪いのあよく知ってるんだもの。

きみ子 そう……でも、やっぱりわたしのこともにくいと思うことがあるでしょ？

藤之助 (エモーションをもって) なして、そんなこと思うんだって、おらだれのことにもにくいと
思ったことないんだもの……おらにどうしても人、にくむことできないんだし。

きみ子 わたしだって、あなたのうちの人を、一べんもにくいと思ったことはないわ。どうしても、
おとなというものは、ああ、けんかばかりするものでしょうね？

藤之助 おらもそう思うんだし、それにつまらないことばかりで、けんかするんだもの。きのう
も、おらうちの男あ、きみ子さんのうちの女中じよぢゆうとけんかして、ガラスをこわした。

きみ子 ええ、そうよ。わたしそのときいなかかったけれども、うちへ帰ったら大ききわぎよ。あのと
き校長先生がおいでにならなかつたら、もっとひどいけんかになるところだったの。

藤之助 そう。校長先生行ったの？ 校長先生どう考えるかしら？

きみ子 (おとなびた調子) 星が悪いんですって。

藤之助 星ってなんの星？

きみ子 わたしもよく知らないの……なんでも、うちのおとうさんも、あなたのおとうさんも、あいてをころす星ですって……まあ、そんなことがあるでしょうか？ (考える) なくなつたう

ちのおばあさんも、よく星って言ってたものよ、……わたしそんなこと考えたくないわ。あなたは、そんなことを信じて？

藤之助 そうね、おら信じるんでもないけども……第一、そうしたこと考えたこともないんだもの……したども、世の中にあなんぼもふしぎなことあると思えば、星というものあるかとも思うんだし。中国の本にあ、天のお星さまみんな人のたましいだつて書いてある……。

きみ子 (さびしげに) そうね、そんなことあるかもしれないわね。でも、わたしのうちで、はじめてこの町へ来たころは、どこのおうちともなかよくしていたわ。そのころは藤ちゃんのおうさんも、うちへきてお酒をあがったことあるのね。藤ちゃんも、よくわたしのうちへ来たものでしよう。それでは、あのころは星がよくて、だんだん星が悪くなったのかもしれないわね。

藤之助 おら、星が悪くなるんでなく、星ああらわれてくるんだと思ひし……だども、そんなこと考えるのはいやだ……おら、これから学校さはいって、いろいろな本を読んでみたい……本の中にあ、なんでも書いてあるんだもの。

きみ子 そうね、藤ちゃん学者になるんだわね。そうになったら、藤ちゃん、わたしのことなんかわ

すれてしまおうでしょうね。

藤之助 わすれない、いつまでたってもわすれない。

きみ子 ほんとう？ でも、そんなに本ばかり読んでいたら、だんだんわたしのことなんかいやになるわ。

藤之助 いいえ、だばって、ふたりして本読むもの、だんだん、なかがよくなるばかりだあし……

おら、そればかり楽しみにして学校さ行くんだ……。

きみ子 (発動期はつどうきに近い女の感覚かんかくをもって) うちのおばあさんが言ったわ……なかのいいのは合

星ぼしだって……合星、いい名だね……(藤之助に近より、藤之助のひざの上に、力なくたれた右の手の上に自分の手をかさねる) まあ、藤ちゃんの手はすべすべしてるわね……わたしの手こんな大きいよ……あら、あなたの手のつめたいこと……こうしてあなたためあげるわ……まるで、懐中時計かいちゆうどけいでも持つてるようよ……ぴくぴくして、なんだか音がしているの……。

(このあいだ藤之助は、息苦しい圧迫あつぱくを感じながら、木ぼりの小さな仏像ぶつぞうのような表情ひょうじょうをしている、まもなく土蔵どぞうといどの間から、まえの売薬行商人ばいやくぎやうしやうにんが静かに出てくる。行商人は借り着からしいあわせを着て、両手りょうてをこしのうしろで、老人ろうじんらしくくんでいる。)

行商人 ごめんくださいませ。ぼっちゃん、こちらにおいででございませうか？ てまえは立とう

と、昨晚さくばんこちらのごやっかになりました。へい、もうだんなも大喜よろこびでな、昨晚はふたりで、とうとう飲みあかしましたよ。ぼっちゃんのはなれにはあかりがついていましたっげが、ぼっちゃんなかなか勉強べんきょうなさいますな。

藤之助 (立ちあがり行商人のほうへ進む。きみ子はすこしはなれて立つ) そうが、おじいさんとまっつたのがな。そして、いつまでいるの？

行商人 さよう、てまえは、きよう立とうと思いましたが、だんなが、ぜひもう二、三日もいるよにとおっしゃいますしな、それにてまえもこんな老人ろうじんのことで、もう二度とこちらへはまいますまいと思いませんでな、もう二、三日ごやっかになろうと存じます。

藤之助 そのほうあいよ。おじいさん、いくつになるんだ？

行商人 てまえはへいもう、一になりますよ。

藤之助 一って、六十一か？

行商人 なかなかあなた、七十一でございますよ。

藤之助 (目をまるくして老人ろうじんの顔かおを見る) ほう、そんなになるがな。おらには六十くらいねしか見えないな。

行商人 ありがとうございます。しかし、てまえどものように、年が年じゅう旅たびでくらししますものは、自分の年には、いっこうおかまいなしで、いつでもわかい心持でおりますよ。(きみ子のほうを見て) それはそうと、このむすめさんは、どちらのむすめさんでございますな？

藤之助 (きみ子のほうを見かえり、署長のうちのほうを指さしながら) この人が? この人あ、このうちの人だ。

行商人 はあ、それでは、お役人のお嬢さんでございませう。おとうさんは、どちらへつとめておいでですか?

藤之助 この人のおとうさ、税務署の署長さんだし。

行商人 (思いあたることのあるような表情で) はあ、署長さまのお嬢さんかな。ふん、ふん、そして、お嬢さんのおうちでは、いつこちらにいらっしゃいましたな?

きみ子 (おそろしそうに、行商人を見て) 五年ばかりまえに来たの。

行商人 はあ、五年まえに。ふん、そしてお国はどちらで?

きみ子 埼玉県ですって。でも、わたし埼玉にいたことないの、いろいろなところにな。

行商人 ふん、ふん。いろいろなところにな。お役人は、へいもう、みんなそうして、所々ほうばう歩きなされるのだ、そのあいだにみんな出世をなされるので。いいお嬢さんだ。(きみ子の顔を見つめて) おいくつかな?

きみ子 十四。

行商人 十四におんななされるかな。(藤之助に向かい) ぼっちゃんの姉さんが、生きていなされると、おいくつだったかな?

藤之助 やっぱり十四だし。

行商人 ふん、十四、いいお子さんでな、てまえの顔かおを見ると、よくなきなすったものだが、どうもてまえには、あのお子さんがなくなられたとは、どうしても思われませんな。だがぼっちゃんは、いい友だちを持っていなさるでおしあわせだ。おまえさまがたは、なかよくしていなさるがいい。(左手へあゆむ)

(藤之助ときみ子は、行商人を見送る。)

はあ、これはふしぎだ。(行商人立ちどまる)わたしがこの倉くらの前まへにくると、赤子あかごのなき声が聞える。なんだか、この倉の中うちのようでもあれば、池いけのほうから聞えてくるようにも思われる。

藤之助 (好奇心こうきしんをもって) え、おじいさん何言なにってるんだ？

行商人 (首くびばかりを藤之助の方ほうへ向むけて) いや、ぼっちゃん、ご心配しんぱいなさいますな。これは、老人らうじんのから耳みみというものでございましょう。てまえはきのうこの倉くらの前まへを通とおりますと、急きゆうに赤子あかごのなき声こゑのようなものが聞えてくるように思おもいましたが、ただ今も、やっぱりそれが聞えてまいましたで、いや、これは、ぼっちゃんのおかあさんが、ここで赤ちゃんをあやしていなさったのを思おもいだしたのでございましょう。

藤之助 (ますます好奇心こうきしんは刺激しげきされて)ほんじゃ、うちのお母がさ、姉あねさを倉くらの前まへであやしていたの？

行商人 (からだをなかばふり向けて) へい、この倉の前へむしろをしいて、それへすわって、お乳^{ちち}をあげなされましたよ。はれ、やっぱり赤子の声だ。だが、これは年よりにはよくあることで、なんにもふしぎはないのでございますよ。ごめんくださいまし。

(行商人は静かに去る。)

きみ子 あれは、なに？ 妙なじいさんね！

藤之助 なんでもない。富山^{とやま}のほうからくる薬売りだし。

きみ子 あの人、薬を売りにきたの？

藤之助 あ、北海道^{ほっかいどう}のほうさ行ってきたんだって。あの人、おらの生まれなさいきに来たことあるんだっていいし。だって、おらの姉さのことよく知っているもん。

きみ子 おつねさんの赤ちゃんの時きたんだっていったわね。そして、あの方は妙^{みょう}なことを言っ

たわ……赤子の声が聞えるって……どうしたんでしょう？ あの人気がいかわ、そうよ、気がいにちがいないわ……。

藤之助 ああ、おらもそう思う……赤子の声が聞えるなんて、おかしいな！ あれ、きつねつきかもしれないねし。

きみ子 (土蔵^{どぞう}のとびらの前に立って、中をのぞくようにして) 倉^{くら}の中から聞えてくるなんて、何

も聞えやしないわね。

藤之助 (きみ子とならんで中をのぞく) ああ、おらにも何も聞えないの。

きみ子 中が暗いこと……わたしいつか藤ちゃん、この中へはいったことあるわ……ハツカネズミの子を、とらえたこともあってよ……ハツカネズミの子は、こんなにちっぽけでかわいかったわ……。

藤之助 (げたをぬいで、石段の上にあがり、やはり中をのぞく) ああ、そしたことがあった。

きみ子 おつねさんたんすをあけて、本をだして、藤ちゃんのおかあさんにしかられたでしょう……おつねさんないたわ……わたしたちもみんなないたわ……。

藤之助 おらのお母さ、あれほどおこったことないし……本だして見てしかられたこと、一ぺんだっていないはで、おらふしぎね思ったし……あれなんの本だかさ？

きみ子 なんの本でしょうね……なんでも子どもにはわからない本かもしれないわ。

藤之助 ほんじゃ、薬の本かもしれない。薬の本は、おらにはちよつともわからないもの。(反省) 力のない好奇心に刺激されて) おら、はいつてみるかな……。

(あみ戸をあける、黒い幕をかさねてたれたようなやみの中に、西日を受けた正面のまどが、のぞきめがねのように赤く見られる。)

きみ子 (同じく石段だんの上にあがる) あら、あんなにまどに日があたっているわ……なんだかお寺てらの中へでもはいるようだわ……でもいいにおいがすること……。

藤之助 カンフルのにおいだ……じゃこのかおりもする……。

きみ子 あら、妙なみょうもの天井てんじょうからさがってるわ、ふさのようなもの、あれなんでしょう？

藤之助 あれケシの実みだし。

きみ子 ケシの実なんにするの？

藤之助 おら、知らないし……きみ子さんじっとしていえ！

きみ子 (藤之助の見つめている同じほうへ目を向ける) なあに？

藤之助 じっとして！

きみ子 なあに？

藤之助 にがりつぼの上にスズメの子あいる……あれ、ばたばたしてとんでる……おらとろうよ……あら鳴いである……。

きみ子 (藤之助をおさえるようにして) にがりつぼの上ならおよしなさいよ……つぼへおちるといけない……スズメの子なんかいやしないわ……藤さんおよしなさい……。

藤之助 (倉くらの中へ突進とっしんする) スズメの子、たくさんいるし……おらとろう、おらとろう……。

きみ子 (夢遊病者むゆうびょうしゃの看護者かんごしゃのように、同じく倉くらの中にはいる) およしなさい……およしなさい……。

(ふたりはまったくすがたをかくす。)

(空虚な舞台は、そのままにすぎる。ただツバキの花が目だたぬように落ちる。しかし、けっしてドラマティックでない。)

きみ子 (中からとつぜんさけぶ) あ、あ、あ、あら藤ちゃん……たれか来て……藤ちゃん……落ちた……藤ちゃんつぼの中へ落ちた……。

(この声とともに、一度戸口のほうへ出て、ふたたびひっかえす、そのとき、とつぜん高くとみかさねたものの床を打つような音が、観客の耳にひびく。)

きみ子 (やわらかなものの、重いものに圧迫されるような音の中に、ごく短いよび声を発する)
あっ……あっ……あっ……。

(人間の社会は、いかに不注意であるかをしめすため、わたしたちは、この空虚な舞台を数分間、そのままにしておかなければならない。二足のげたが、夕日に照らされているが、だれも来ない。)

きわめて静かに (幕)

底本 日本少年少女文学全集 9

出版者 河出書房

出版年月日 昭和 32